

(済々黌高等) 学校 令和元年度 (2019年度) 学校評価表

1 学校教育目標
<p>本黌建学の精神である三綱領を根幹とし、徳育・体育・知育の三育併進、文武両道の気風を尊重し、一つ一つの教育活動を着実に実践し学校の活性化を目指す。生徒を育成するに当たっては</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 他者への思いやりを大切にし、社会に貢献する生徒の育成 2 心身ともに逞しく豊かな人間性を備えた生徒の育成 3 志を高く持ち、自ら求めて学ぶ生徒の育成 <p>を目指す。</p>

2 本年度の重点目標
<ol style="list-style-type: none"> (1) 社会に貢献できる生徒 (グローバルリーダー) の育成 (2) 生徒指導の充実 (3) 心身の健康の保持増進及び安全教育の徹底 (4) 学力の向上 (5) 進路指導の強化 (6) 学校全体へのSGHの成果の普及推進

3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学 校 経 営	建学の精神の継承	教育活動の中での三綱領の理念の実践	三綱領の精神を理解し、自らその実践に励む生徒を育成する。	・学校全体で取り組み、様々な教育活動の場で折に触れ意識させる。	3.1 A	学校行事など内外のあらゆる場面で三綱領の精神が発揮できている。昨年度より生徒の評価は高まりを見せている一方で保護者の評価は下がっている。
	SGH成果の学校全体への普及	グローバル人材の育成	校外研修・海外研修をより充実させる。	・済々未来企画委員会が立案して、学校全体で取り組む。	3.0 A	3か国への海外研修は好評であったが、更に改善を図る必要がある。
	学校の活性化	学校行事の工夫・改善	生徒に活躍の機会を与え魅力ある学校作りを目指す。同時に「働き方改革」を推進し生徒と向き合う時間の確保を図る。	・運営委員会を定期的実施し検討・協議の機会を確保する。 ・PDCAサイクルを機能させ年度内に改善するよう努める。 ・学校閉庁日(5日)を導入する。	2.8 B	各部自己評価のサイクルは定着したが、提言に対する対応は工夫が必要である。5日間の学校閉庁日を設けたことで多少リフレッシュできた。今後も継続して取り組む。
	職員の資質向上	校内研修の充実	校内研修を通じて職員の資質向上を図る。	・各部が立案し、当面の課題に対し学校全体で取り組む。	3.1 A	予定していた研修は実施できたが、更に充実させたい。
	安全管理	施設・設備の保守・点検	危険箇所には迅速に対応する。	・定期的な安全点検に加え、報告・連絡・相談を確実に行う。	3.1 A	修理等の要望には迅速に対応できた。職員個々の更なる安全意識の高まりが求められる。

	言語活動の充実	グローバル社会をリードする人材育成のための言語活動の充実	論理的思考力、課題解決力養成のための言語活動を推進し、授業改善につなげる。	・各学年で論理的思考力を伸ばす論文指導を推進する。 ・各教科で言語活動の充実を図り、授業改善につなげる。	3.0 A	各教科、課題解決力養成のための授業改善に取り組み、生徒の意識も変化しつつある。来年度も継続して行う。
	SOSの出し方に関する教育	リーダーシップ教育を柱としたカリキュラムの工夫・改善	SOSの出し方に関するループリックを作成する。	教育相談部とグローバルキャリア課を中心として各部署で連携をとりカリキュラムマネジメントを行う。	2.9 B	職員研修と公開授業を通して権限のいないリーダーシップを柱とした授業の工夫ができた。カリキュラムマネジメントの深化とループリックの一般化が不十分である。
学 力 向 上	基礎学力の充実	学習時間の確保	平日2時間以上の家庭学習時間を確保させる。	・帰宅時間・睡眠時間等、生活時間の見直しをさせる。 ・家庭学習時間調査の結果を踏まえ主体的に学習に取り組めるよう指導を強化する。	2.9 B	5年前および10年前との比較から、生徒の家庭学習時間は増加傾向にある。今後は、家庭学習の中での生徒の主体的な取組の割合を増やしていく必要がある。そのためには、日常の授業と生徒の主体的な学習とが結びつくように授業改善を推進していかなければならない。家庭学習時間調査結果が学年・担任レベルにとどまらないよう、各教科に積極的な活用を呼びかける。生徒を主体的な学習に導く授業改善、週末課題等の工夫・精選を推進する。
	わかる授業・考える授業の創造	教師の指導力の向上	生徒の学習意欲を高める指導を実践する。	・教科会や公開授業を充実させ、生徒が主体的に考える授業展開の工夫、教材の研究に努め、生徒にわかる授業、実力をつける授業を実践する。 ・授業評価アンケートを実施し、生徒の実態・要望などを把握し活用する体制を作る。	3.1 A	公開授業は、その目的を明確にして参観を促す必要がある。授業評価アンケートは、教師が自身を振り返り授業改善等に活用しやすいように工夫が必要である。公開授業週間に限らず、日常から先生方に負担なく授業参観等ができる仕組みを提案し、かつ、ある程度の参観実績を求めていく。また、外部へも授業公開を随時周知していく。生徒授業アンケートの質問項目を次期学習指導要領にも対応できるも

						のに更新した。今後先生方の授業改善に活用していただけるよう、継続的に見直しを図っていく。
キャリア教育（進路指導）	生徒の進路目標の実現	生徒の進路意識高揚に向けた取組の実践	講演会、出張講義などの充実とともに丁寧な個人指導を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・継続的に刺激を与え、将来のキャリアを主体的に考え、自らの可能性にチャレンジする生徒を育む。 ・面接指導を充実させ生徒を理解し、信頼関係の構築と適切な進路指導に繋げる。 	3.1 A	1年生の職業別講演会、2年生の出張講義等を通して生徒たちの進路意識の高揚はある程度達成できたのではないかと思われる。進路講演会、職業別講演会、大学出張講義等の講師の選定を目的に応じて慎重に行う。
		教師の教科指導力の向上	難関大入試に対応しうる教科指導力をつけ、魅力的な授業・課外を実践する。	<ul style="list-style-type: none"> ・教科会と連携し指導力向上と指導法の継承に努める。 ・校内模試の更なる充実を図り、結果を活用する。 	3.1 A	生徒たちが第1志望大学の過去問を進路室にコピーをしに来る数が増加した。過去問に関する質問をする生徒の数が増加した。入試問題の分析、解答解説を製本化することにより、より一層の生徒たちの活用を促したい。また、入試問題研究の生徒への還元を目的とした研究授業の実践を他教科にも広めたい。
		教師の進路指導力の向上	3年間を見通した進路指導の実践力をつける。	<ul style="list-style-type: none"> ・校内での進路に関する職員研修や学力検討会、進路検討会を実施する。 	3.0 A	個々の生徒の第1志望目標達成に向けた各学年の指導者間のチームワークがきちんととれているように思われる。各学年の横の関係だけではなく3年間を見通した学年間の情報の共有を図れるような取組を行っていくことが課題である。
生徒指導	済々覺生としての矜持を保持させる指導	徳育の推進	「他者を思いやる心」の育成を図り、社会的倫理観を醸成する。	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒会行事等において協力し支え合う姿勢を養う。 ・教育相談部と連携して、いじめを未然に防ぐ取組を行う。 	2.9 B	機会を捉えモラルの向上を呼び掛け「心の教育」を大切にしているが、思いやりに欠ける言動は皆無ではない。
		基本的な生活習慣と自己規律の確立	時間の厳守や端正な服装の徹底など基本的な生活習慣を確立させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・学校全体で各学期登校指導を実施する。 ・全職員共通理解のもと一貫した指導を行う。 	2.9 B	各学期の登校指導は実施できた。服装・頭髪等は概ね良好である。全職員による一貫した指導が望まれる。

	安全教育の徹底	交通ルールの遵守と安全意識の高揚	社会のルールや規則等を遵守するとともに防犯意識を高める取組を実施する。	・交通講話・実技講習会を実施する。 ・二重ロックの励行を生徒交通委員会で行う。	2.8 B	自転車通学生の事故が34件あった。しかし、きちんと事故後の報告がなされた。交通事故件数は、昨年度よりわずかに減少しており、生徒の安全意識が高まるように工夫する必要がある。また、自転車二重ロック点検を行うとともに交通事故後の対応を適切に行うよう徹底させる必要がある。
人権教育の推進	豊かな人権感覚を身に付けた生徒の育成	知識的側面からの取組	人権教育における学習指導の工夫改善を行う。	・生徒及び職員に対し校外研修への参加を促す。 ・人権教育LHRや講演会を計画的に実施する。	3.1 A	職員研修では怒りの対処法などについて学んだ。アンケートで把握したいじめ事案には迅速かつ適切に対応した。職員研修、人権教育LHRについては人権教育推進委員会を通して改善を図る。「学校いじめ防止基本方針」の周知徹底、及び、アンケートの有効活用を図る。
		価値的・態度的側面からの取組	生徒一人一人の心の内面に働きかけるような指導を行う。	・面談を充実させ生徒が悩みを相談しやすい環境を作る。 ・生徒理解のための職員研修を定期的実施する。 ・人権教育推進委員会を適宜実施する。	3.0 A	生徒理解のための職員研修を2回実施した。生徒のみならず保護者もスクールカウンセラーとの面談がしやすいよう配慮し、活用いただいた。
	命を大切にすることを育む指導	教材の精選と職員の共通理解	関連する教科・領域等の学習を組み合わせることで単元を構成し、多様な指導を実施する。	・全学年とも、計画的に指導を行う。 ・感想の集約等から指導を振り返り次の指導に繋げる。 ※SOSの出し方に関する教育と連動	3.1 A	各教科や特別活動などを中心に取り組むことができた。SOSの出し方教育では、自己肯定感のアンケートを実施し、生徒の把握に活用した。
いじめの防止等	いじめの未然防止	積極的な啓発活動の実施	いじめをしない・させない・許さない態度を堅持させる指導を徹底する。	・ストレス対処教育のエンカウンターを実施する。 ・生徒会を中心とした啓発活動を行う。 ・いじめ防止対策委員会を毎学期行い、生徒の状況の把握と対応に努める。	3.3 A	1年生は入学直後の宿泊研修時にエンカウンターを実施した。また、SNS利用に係る講演会を全校生徒を対象に実施し、生徒指導部からも繰り返し注意喚起を行った。いじめ防止対策委員会を計画的に開催しスクールカウンセラーからの助言を受けた。

	いじめへの迅速な対応	いじめの早期発見・早期解決と再発防止	いじめまたはいじめを疑われる事態が発生した場合、被害・加害双方の生徒に速やかに対応、指導を行う。	・いじめ人権アンケートにより実態把握と早期発見に努める。 ・いじめ防止対策委員会を開催し問題解決に努める。 ・情報を共有し、事後も指導を継続する。	3.2 A	予定どおりアンケートを実施したが、いじめ問題は皆無ではなかった。今後もいじめを未然に防ぐ取組を教育相談部や各学年部と連携を密にしながら行う。
健康教育	健康で安全な生活を送るための実践力の育成	生徒の心身の健康管理と傷病予防	生徒が自身の健康状態を把握し、健康で安全な生活を送れるよう指導を行う。	・生徒保健委員会の校外研修参加及び「保健だより」の発行により生徒による啓発を実施する。	3.2 A	健康調査を基に生徒の健康啓発に関する研究を行い、校内外で活動を行うなど、年度当初の計画どおり実施できた。今後も活動を継続する。
			熊本地震後の生徒の心身の健康管理を行う。	・心と体の健康調査や保健室来室状況から実態把握に努め、職員間で情報を共有し対応する。	3.3 A	昨年度より保健室在室者が多い。熊本地震の影響がみられる生徒がいるので関係職員と対応にあたる。今後も配慮を要する生徒には職員、カウンセラー、関係機関と連携しながら対応していく。
	教育環境の整備	清掃指導の徹底と環境保全の意識や奉仕の精神の育成	毎日の清掃を生徒、職員全員で実施し、校内の環境整備を行う。	・学校環境衛生検査及び毎月の安全点検を実施する。 ・美化委員による校内環境の整備を行う。	2.8 B	掃除目標を立て、目標どおりに掃除を徹底することができた。エアコン・電灯の消し忘れも多く生徒・職員の環境保全への意識を高める工夫が必要である。
図書館教育	読書習慣の形成	読書指導の推進	情報提供、時間の設定により読書意欲を高め、図書館利用を促し、読書習慣を身に付けさせる。	・「図書館便り」「麒麟児」「碧落」の発行、生徒図書委員会の広報活動を活発に行う。 ・年に2回「朝の読書」週間を実施する。	3.0 A	貸し出し冊数が昨年度より減少（1月21日現在5590冊）本の福袋等新企画を実施したが周知不足もあり利用は伸びていない。朝の読書週間前の広報活動が弱く、周知ができていなかった。週間初日朝に借りに来る生徒が多数いたので、前週までに図書館で借りてもらう方を講じる。
	学習活動支援の充実	蔵書や設備の充実	資料の充実と環境整備をすすめる。	・館内のレイアウトを工夫する。 ・各教科との連携を図り、必要な資料を収集する。	3.3 A	タイムリーな企画展示で生徒の興味関心を広げることができた。各教科・各学年からこまめに情報を収集し、企画コーナーをさらに充実させる。

保護者との連携	同心会（PTA）と学校の積極的な連携・協力	連携を深め、円滑な校務運営を行うための情報提供	保護者への情報提供に努め、本校教育への理解と協力を得る。	・学校HP・同心会HPと会報「同心」の充実に一斉メールの活用をする。	3.2 A	少しずつではあるが、更新が早くされつつある。改良が必要なサイトもあるので工夫していく。学年ごとの行事などの記載を増やす必要がある。総務以外の更新者を育成する必要がある。
		PTA活動の活性化	同心会総会や学校行事等への参加者を増やし、総会（報告会を合わせて）の出席率80%以上を維持する。	・総会や行事の案内など迅速に連絡を行う。 ・総会の効率的な進行や運営を企画する。	3.2 A	総会等は例年どおりの運営はできた。今後は、総会や進路講演会など参加者を増やす。会の内容の精選と実施時間の短縮を行う必要がある。
地域連携（コミュニティスクールなど）	学校運営協議会委員（防災型）との連携・協力	連携を深め、防災・減災を図るための情報共有	学校運営協議会委員と学校との情報共有に努め、理解と協力を得る。	・防災型コミュニティスクールの円滑な運用を図る。 ・地域と連携した防災訓練・AED講習会を実施する。	3.1 A	予定どおり実施できている。地域との連携をはかることができた。生徒達をもっと積極的に参加できるように工夫が必要である。

4 学校関係者評価

(1) 自己評価について

- ・三綱領を理念とする教育を先生方が熱心に行われているのが伝わった。
- ・学力向上、進路指導が問題なく行われている。
- ・きめ細やかな点検・評価がなされており、効果的なPDCAサイクルが確立されている。更なる検討と具体的な実践を期待している。
- ・図書館の利用については、低調の方向に移行しているのを痛感している。活字離れにならないよう指導を望む。
- ・なぜからかってはいけないのか、いじめてはいけないのか等在学中に具体的な人権教育を深く学んでほしい。
- ・多士会館での自習の習慣は大変興味深い。生徒同士の励みや学ぶ環境を今後も応援したい。
- ・本年度は各学年とも面談の時間が増えている。生徒にとって大いに意味のある時間なので、時間も労力もかかるが、継続してほしい。
- ・3学年でリーダーシップを有する生徒が増えているとのことで、楽しみである。
- ・PTAとの協力関係も非常に良好で、保護者の理解を得る努力をされている。
- ・交通事故防止のための指導・教育の時間が不足しているようだ。人権教育とともに、日常の感覚として身につけるための手段が必要である。
- ・学校行事に取り組む生徒の積極性が、全生徒に波及すればもっと良くなる。また、先生方の負担が軽減されるようPTAの協力も必要ではないか。
- ・2.8の評価は、項目上決して低い評価ではなく、良く取り組まれている。

(2) 次年度への課題・改善への方向性について

- ・SGH後に取り組んでいるSDGsに関する活動について、もっと外部にわかるように掲示に力を入れるとよい。
- ・学校行事や課外授業などの取組等を見直し、先生方の勤務時間の改善（働き方改革）を進めてほしい。

- ・改善が必要な分野の中には、時間の確保が難しいものもあり、県全体、義務制も含めた取組を期待している。
- ・学力向上は授業改善が重要である。評価から改善の方向性を共有できるようになれば良い。

5 総合評価

職員による4段階の評価に基づいて示した評価結果の平均は、全ての評価項目において概ね「3」となった。平均すると「3.1」であり、全体的には概ね達成できていると判断できる。各項目の評価を比較すると、「学校の活性化」、「安全教育の徹底」と「清掃指導の徹底と環境保全の意識や奉仕の精神の育成」の項目が最も低い。「学校の活性化」の評価の観点は「学校行事の工夫・改善」であり、先生方から出された提言にどう対応していくか工夫が必要であり、それが働き方改革にもつながる。「安全教育の徹底」については、自転車通学生の事故は昨年よりもわずかに減少しているが、自損事故も多く、安全意識を高めていかないといけない。その他、生徒指導の項目は昨年より全て評価が下がっており、全職員共通理解のもと一貫した指導が必要と思われる。「清掃指導の徹底と環境保全の意識や奉仕の精神の育成」が2年連続評価を下げた。これは生徒の倫理観・使命感育成に係る項目であり、本校三綱領の根幹となる部分である。「2.8」という評価自体は極端に低いわけではないが、一定数の職員が「やや不十分」と評価しており、この危機感を次年度の具体的な取組へと繋ぐ必要がある。一方、昨年最も評価が低かった「基礎学力の充実」の項目は、わずかながら上昇した。評価の観点である「学習時間の確保」が増加傾向にあるためだと思われる。今後更に充実させるためには、家庭学習の中での生徒の主体的な取組の割合を増やしていく必要があり、そのためには日常の授業と生徒の主体的な学習とが結びつくように授業改革を推進していかなくてはならない。

「SGH成果の学校全体への普及」については、昨年同様「3.0」という評価であり、校外研修・海外研修では一定の成果を上げることができた。また、12月に行われた「済々黌未来探究成果発表会」では生徒の満足度も高く、充実したものとなった。ただし、より良いものにするためにはいずれも次年度に向けて改善が必要である。今年度の研究指定事業である「SOSの出し方に関する教育」は「命を大切に作る心を育む指導」とリンクして、「2.9」という評価を得ている。

6 次年度への課題・改善方策

SGH後の取組として、1,2学年全体で取り組んでいる活動は、課題研究、英語ディベート、校外研修、海外研修と多岐にわたっている。12月に行われた「済々黌未来探究成果発表会」では生徒の満足度も高く充実したものとなったが、より充実した内容にするためにも改善が必要である。また、今年度より研究指定を受けた「SOSの出し方に関する教育」は、今年度は対象が1学年のみだったが、来年度は1,2学年とし、職員全員が参画するカリキュラムマネジメントを充実させ、学校を上げて取り組むようにしたい。